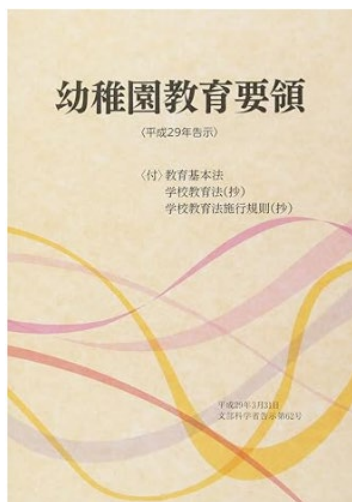


# 3 要領・指針に基づく教育活動について

## 3 要領・指針

## 解説



## 指導資料

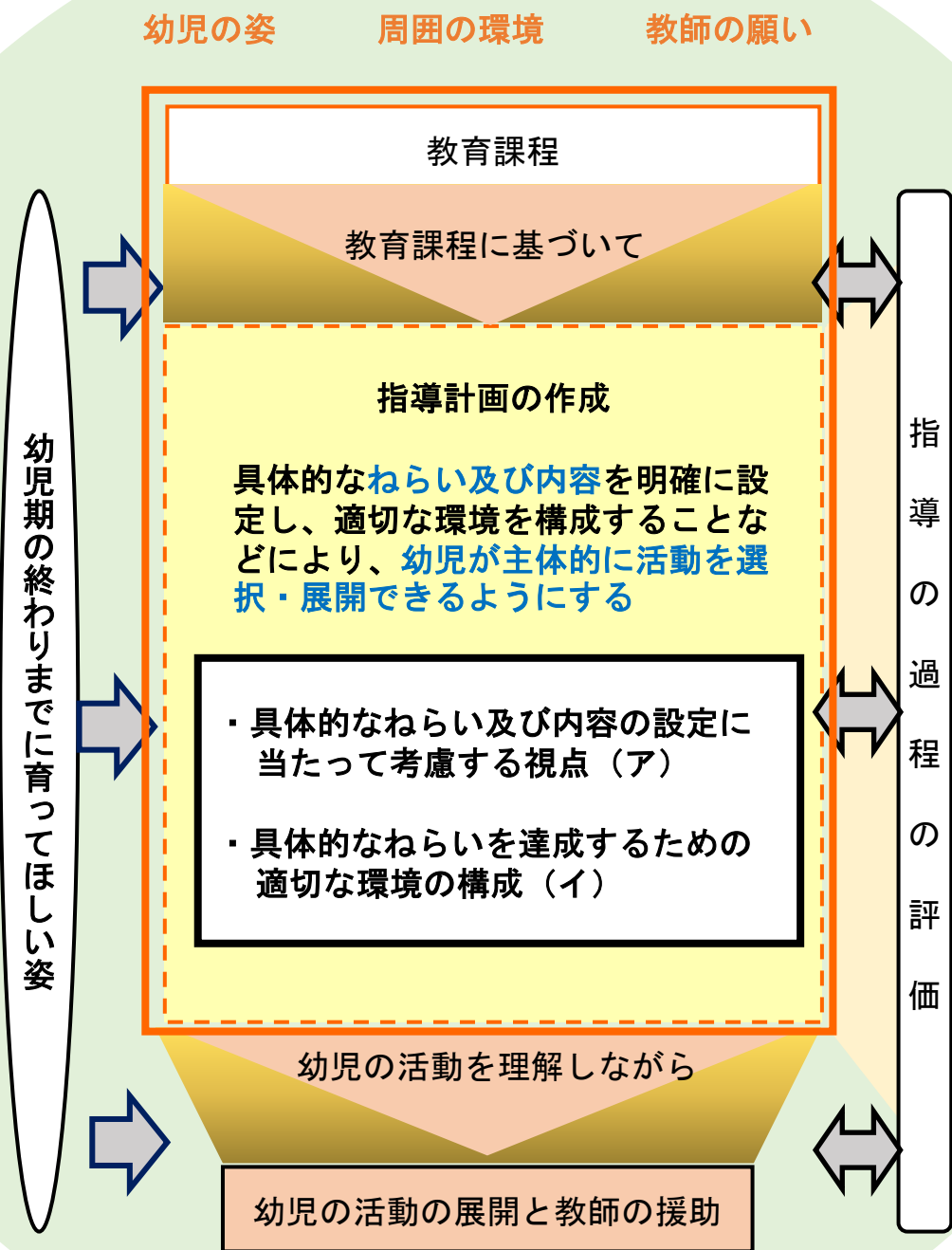


第1章 専門性を高めるための記録の在り方  
第2章 実践者のための記録の実際  
第3章 記録を指導や評価の実際に生かす

第1章 指導計画作成に当たっての基本的な考え方  
第2章 指導計画の作成の具体的な手順とポイント  
第3章 指導計画の作成と保育の実際  
第4章 指導計画の評価・改善のポイントと実際

第1章 幼児理解に基づいた評価の意義  
第2章 幼児理解に基づいた評価の基本的な考え方  
第3章 幼児理解に基づいた評価の実際（実践事例）

# 指導計画の作成 (イメージ図)



## 教育課程

- ・教育課程に沿って園生活を長期的に見通す
- ・全教職員が話し合って作成する

### 長期の指導計画

その時期の発達や幼稚園生活の流れなどを見通す  
教師の思いや願いを含ませる

具体的なねらいや内容を設定する

具体的なねらいや内容、季節や行事などを踏まえた環境の構成を想定する

その時期の環境に関わって活動する幼児の姿の予想に基づき、教師の援助を想定する

- ・長期の指導計画を基に、実際の幼児の姿に着目して具体的に作成する
- ・学級担任が中心となって作成する

### 短期の指導計画

前週、前日の幼児の生活する姿から発達を捉える  
教師の思いや願いを含ませる

具体的なねらいや内容を設定する

具体的なねらいや内容、幼児の興味や関心などを踏まえて、具体的な環境の構成を想定する

その週や日の環境に関わって活動する幼児の姿の予想に基づき、教師の具体的な援助を想定する

※「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿

# 指導計画の作成について

幼児が発達に必要な体験ができるよう、幼児の実態に応じて、計画を立て、環境を構成することが大切。そして、保育を振り返り、計画や保育の展開に生かしていく。先生は、こうしたP D C Aサイクルに取り組んでいる。

## 計画の作成

幼児の生活する姿から発達を捉える  
先生の思いや願いを含ませる

具体的なねらいや内容を設定する

具体的なねらいや内容、幼児の興味や関心などを踏まえて、具体的な環境の構成を想定する

環境に関わって活動する幼児の姿の予想に基づき、先生の具体的な援助を想定する

## 保育の展開

幼児の発達と先生の指導の改善の視点から、保育の振り返り

「幼児を捉える視点の例」などから、幼児の発達を捉える。そして、どのように育ててほしいかという先生の願いを含ませて、「ねらい」と「内容」を設定。

※幼児を捉える視点の例

- ・ 幼児らしいサインをキャッチする
- ・ 過去の体験と今の姿との関連を捉える
- ・ 長い目で見ると
- ・ 多面的に捉える
- ・ 集団の中での幼児を捉える

環境の構成の考え方

- ・ 発達の時期に即した環境、興味や欲求に応じた環境、幼児にとって新しい出会い（意味や価値）がある環境、生活の流れに応じた環境などの視点から環境を構成する。
- ・ 物的、人的、自然的、社会的など、様々な環境条件を相互に関連させて、幼児が活動したくなるようにする。
- ・ 環境のもつ特質や特性を理解し、幼児の関わり方を予測する。

※例えば、幼児数人が園庭で探検ごっこをし、小道具を作って「明日続きをしよう」と約束して今日になったと仮定。今日の保育室での製作は、昨日友達とした約束、この後仲間と探検ごっこをするという期待、天気がよくて外に行きたいという気持ちの高まり、先に作った友達が待っている状況などの条件の下で行われる。その場にいる友達や先生、そのときの自然事象や社会事象、空間的条件や時間的条件、その場の雰囲気なども幼児の主体的活動や体験の質に影響を与えている。

環境との関わりを深める先生の存在

（モデル、共感・共同、励まし・ヒント・手助け・相談相手等）

実際の保育では、幼児の心を揺り動かす環境は多種多様にあり、幼児の活動は先生の予想をこえて様々に展開することがある。その場合、新たに幼児が自ら発達に必要な経験を得られるよう、環境を再構成する。

先生の指導の改善の視点

- ・ ねらいや内容の設定は適切であったか
- ・ ねらいを達成するためのふさわしい環境の構成であったか
- ・ 幼児の成長や発達につながるような具体的な援助ができていたか



# 育みたい資質・能力

## <幼稚園教育要領>

第1章総則

第3 教育課程の役割と編成等

2 各幼稚園の教育目標と教育課程の編成

**教育課程の編成に当たっては、幼稚園教育において育みたい資質・能力を踏まえつつ、各幼稚園の教育目標を明確にする**とともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。

(関連部分)

幼保連携型認定こども園教育・保育要領 第1章総則、第2、1(2)

保育所保育指針 第1章総則、3(1)(2)

## <幼稚園教育要領解説>

- それぞれの幼稚園は、その幼稚園における教育期間の全体にわたって幼稚園教育の目的、目標に向かってどのような道筋をたどって教育を進めていくかを明らかにするため、幼稚園教育において**育みたい資質・能力を踏まえつつ、各幼稚園の特性に応じた教育目標を明確にし、幼児の充実した生活を展開できるような計画を示す教育課程を編成して教育を行う**必要がある。

## <幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開>

- 幼稚園では、学校教育のはじまりとして**幼稚園教育において育みたい資質・能力を育成するよう教育課程を編成する**こととなる。
- 教育課程の編成・実施においては**幼稚園教育において育みたい資質・能力を念頭に、幼児理解に基づき、PLAN(計画)、DO(実践)、CHECK(評価)、ACTION(改善)といったPDCAサイクルの好循環を通して、組織的かつ計画的に各園の教育活動の質の向上を図る**ことが必要である。

# 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

## < 幼稚園教育要領 >

### 第1章 総則

第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」  
3 次に示す **「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」**は、第2章に示すねらい及び内容に基づき活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、**「教師が指導を行う際に考慮する」**ものである。

(関連部分)

幼保連携型認定こども園教育・保育要領 第1章 総則、第1、3 (3)

保育所保育指針 第1章 総則、4 (2)

## < 幼稚園教育要領解説 >

- 幼稚園の教師は、遊びの中で幼児が発達していく姿を、**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」**を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、**「指導を行う際に考慮する」**ことが求められる。
- 実際の指導では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が**「到達すべき目標ではない」**ことや、**「個別に取り出されて指導されるものではない」**ことに十分留意する必要がある。もとより、幼稚園教育は環境を通して行うものであり、とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に応じて、これらの姿が育っていくものであり、(中略) **「全ての幼児に同じように見られるものではない」**ことに留意する必要がある。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は5歳児に突然見られるようになるものではないため、5歳児だけでなく、**「3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていく」**ことに留意する必要がある。

# 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

## <幼稚園教育要領>

### 第3 教育課程の役割と編成等

#### 1 教育課程の役割

また、各幼稚園においては、6に示す全体的な計画にも留意しながら、**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること**、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

（関連部分）

幼保連携型認定こども園教育・保育要領 第1章総則、第2、1（1）

保育所保育指針 第1章総則、3

## <幼稚園教育要領解説>

- 園長は、全体的な計画にも留意しながら**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて教育課程を編成すること**、教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保して改善を図っていくことなどを通して、各幼稚園の教育課程に基づき、全教職員の協力体制の下、組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る**カリキュラム・マネジメントを実施することが求められる**。

## <幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開>

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は目標や目的としたり、教育課程や指導計画に位置付けたりするものではない**。幼児期にふさわしい生活を通して、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であり、これを念頭に置きながら、幼児を理解し、また教育課程の編成や指導計画の作成をする。

# 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

## <幼稚園教育要領>

5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

(2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

(関連部分)

幼保連携型認定こども園教育・保育要領 第1章総則、第2、1（5）

保育所保育指針 第2章、4（2）

## <幼稚園教育要領解説>

- 子供の発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼稚園と小学校の教師が共に幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。すなわち、子供の発達を長期的な視点で捉え、互いの教育内容や指導方法の違いや共通点について理解を深めることが大切である。
- 幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るため、小学校の教師との意見交換や合同の研究会や研修会、保育参観や授業参観などを通じて連携を図るようにすることが大切である。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有して意見交換を行ったり、事例を持ち寄って話し合ったりすることなどが考えられる。

### < 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開 >

- 幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に当たっては、それぞれの教育の目的・目標や教育課程の連続性・一貫性と発達段階に配慮した違いとの関係を体系的に理解し、相互に相手の教育に関する理解を深めていく。相互理解を深める方法として、幼児と児童の交流の機会を捉えて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、互いの幼児観や児童観について意見交換をしたり、保育参観や授業参観を通じて互いのよさや違いを実感したりすることが考えられる。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、幼稚園と小学校の教師が相互理解を深めていくには、幼児と児童の交流は貴重な機会である。幼児と児童の活動している姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に捉え、幼稚園の教師が捉えた幼児と児童の姿、小学校の教師が捉えた幼児と児童の姿について意見交換をすることにより、それぞれが捉えた姿の共通点や相違点が見えてくる。それらをきっかけとして、幼児や児童を捉える視点、教師の関わり方や教師の教育観などについて協議を深めていくことなどが考えられる。また、幼稚園と小学校の教師の合同研修会において、事例を持ち寄って意見交換をしたり、保育参観や授業参観に参加して相手の教育について学んだりすることも考えられる。